

公民館の図書室は 学びの入口・みんなの本棚

国立市中 1-15-1  
TEL.042-572-5141  
FAX.042-573-0480  
国立市公民館

# 図書室月報

2020年(令和2年)4月5日  
第683号



## 図書室をご利用ください。



—市民の本棚として公民館活動の資料室として—

公民館図書室には約二万五千冊余りの蔵書があり、「市民の本棚」として利用していただけるよう運営しています。公民館図書室は一人でも気軽に利用できる場所です。新聞の閲覧や、本・雑誌を借りることが出来ます。公民館では市民の皆さんが参加できる講座や催し物を行っており、そのテーマ・内容に関連した本を優先してそろえています。このように、公民館主催の講座や市民の学びと密接に結びついて運営していることが、公民館図書室独自の特徴です。

### ◆図書室のつどい

毎月一回開催しています。  
文学・社会科学・自然科学・時事問題等、さまざまなテーマの本をとりあげ、著者に来ていただきお話を聞く催しです。  
著者の話を直接聞くことで、そのテーマ・課題への関心や理解がより一層深まります。



### ◆図書室月報の発行

ご覧になっているこの「図書室月報」は、公民館図書室の利用者や講座参加者に原稿を寄せていただき、掲載しています。一ページ目は「図書室のつどい」等の講座参加者の感想や、読んだ本の感想を載せています。最終ページの「私の本棚から」は、お一人の方に六回連続で、興味を持った本などについて感想、紹介を書いてもらっています。  
紙面を通しての交流や学び合いの場となるよう毎月発行しています。

### ◆市民グループの発行物・ミニコミ収集

市内で活動するグループや団体が発行しているチラシ・冊子等のミニコミ誌を収集して、閲覧できるようにしています。市民活動を集積・記録し、共有するという公民館図書室の役割として行っています。  
グループ活動で発行・出版したものがありましたら、ぜひ図書室に寄贈いただければと思います。

### ◆くになちブッククラブ

年間のテーマを設け、日本文学から八作品を選び、参加者の読みの発表と講師の講義ですすめる読書会です。  
二〇二〇年度は「空間を超えて世界と向きあう文学」というテーマで開催します。今号三ページ目に年間の予定を載せています。



## 公民館図書室の本や雑誌を借りたいときは？

国立市民・在学・在勤の方、  
国分寺、府中、立川、日野市民  
は本を借りることができます。

本や雑誌を借りるためには、『くになち図書利用カード』が必要になります。

- ◇くになち図書館のカードをお持ちの方は、そのままお使いください。
- ◇カードをお持ちでない方は、新たに登録をする必要があります。  
住所が確認できる健康保険証、運転免許証などをお持ちください。  
詳しくはお問合せください。
- ◇カードは5年ごとに更新が必要です。



ブッククラブから

くにたちブッククラブ文集ができました。

大井 利雄 (文学講座連絡会編集委員会)



二〇一九年度くにたちブッククラブの文集は、講座参加者の感想を中心にまとめられています。ここでは大井利雄さんが書いてくださった「あとがき」の文章を抜粋して紹介します。

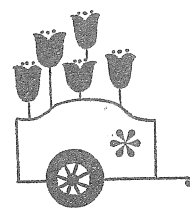
ブッククラブ参加の意義

東日本大震災も来年で十年になる。その年にブッククラブに参加し、昨年やつと紹介されてきた作品群327冊を読み終えた。その間、傷跡が癒えず、原発の処理が曖昧なまま、時がたった。言葉の大事は常に言われていることだが、軽薄に時の権力者が疎かにし責任を回避していることに危惧を覚える(募っているが募集していない)、「二飯論法」など。自己保身は人間の性であり否定できないがゆえに恣意的に曲げられない歯止めの仕組みが必要。指弾するためには日頃の言動への努力が欠かせない。

言葉の重みについて教授を受けるブッククラブに参加し種々の刺激を受け言葉を深耕できたことに感謝する。(ブッククラブ参加の意義)

ブッククラブの読書会に参加することはいくつもの楽しみがある。

- ①講師の先生方の解説や紹介される参考資料により視点がひろがること
- ②参加者から様々な価値観の感想を聞けること



③感想を述べ書くことで作品への読みが深まること  
④ひとりでは読まないだろう作品にも接すること  
など個人のみ読書では出会えない多くの知見を得ることにある。

(限られた時間での意思伝達)

限られた時間の中で有意義に討議するためには各人の想いがある。たとえば受講者と先生の発言の順序

①感想を始めに述べる。

②先生が始めに作品を紹介する。筆者としては、初心の感じ方が重要であり、読者が事前に感じたことを述べ、先生の話で振り返る方がよいと思う。

限られた時間で意を伝えることは容易ではない。聞く人の気持ちを考える余裕を持てるよう研鑽したい。



文集をお読みにになりたい方は、公民館図書室までお越しください。

新着図書から

〈総記〉

図書館魔女は不眠症 鎌田浩毅 (KADOKAWA) 019 010

哲学 心理学 宗教

世界哲学史 伊藤邦武責任編集 (筑摩書房) 102

新実存主義 マルクス・ガブリエル (岩波書店) 114

日本思想史 末木文美士 (岩波書店) 121

無気力の心理学 波多野誼余夫 (中央公論新社) 141

宗教者と科学者のおつきあひ対話 有馬頼底 (かもがわ出版) 160

〈歴史〉

空白の日本史 本郷和人 (扶桑社) 210

特攻隊員の現実 一ノ瀬俊也 (講談社) 210

近世史講義 高埜利彦 (筑摩書房) 215

「ユダヤ」の世界史 臼杵陽 (作品社) 227

レバノンから来た能楽師の妻 梅若マドレーヌ (岩波書店) 289

千畝の記憶 岐阜新聞社編集局 千畝の記憶 取材班 (岐阜新聞社) 289

〈社会科学〉

叛逆老人は死なず 鎌田慧 (岩波書店) 304

リベラル・デモクラシーの現在 樋口陽一 (岩波書店) 311

内戦と和平 東大作 (中央公論新社) 316

EU離脱 鶴岡路人 (筑摩書房) 319

現代経済思想史講義 根井雅弘 (人文書院) 331

ラディカル・マーケット エリック・A・ボズナー (東洋経済新報社) 332

移民の経済学 友原章典 (中央公論新社) 334

学生と市民のための社会文化研究ハンドブック 社会文化学会編 (晃洋書房) 361

7つの階級 マイク・サヴィジ (東洋経済新報社) 361

分譲マンション危機 小林道雄 (幻冬舎メディアコンサルティング) 366

フィンランド人はなぜ午後4時に仕事が終わるのか 堀内都喜子 (ポプラ社) 366

〈くにたちブッククラブ〉

# 空間を超えて世界と向きあう文学

月に一度、小説の世界に浸ってみませんか。この講座では、作品を読んで各自の読みを出し合い、参加者の話や講師のお話を聞いて読みを深めます。

今年度のブッククラブは、一年を通して時間や空間を超えた世界を味わうことができるような作品がそろいました。どうぞご参加ください。

月日	作品	講師
5/14(木)	西加奈子『i』(ポプラ文庫)	紅野 謙介 (日本大学・日本近代文学)
6/11(木)	沼田真佑『影裏』(文春文庫)	佐藤 泉 (青山学院大学・日本近代文学)
7/9(木)	東山彰良『流』(講談社文庫)	榎本 正樹 (現代日本文学)
9/10(木)	井上靖『敦煌』(新潮文庫)	大木 志門 (山梨大学・日本近代文学)
10/8(木)	柴崎友香『わたしがいなかった街で』(新潮文庫)	小平 麻衣子 (慶應義塾大学・日本近代文学)
※11月(木)	宇野千代『色ざんげ』(岩波文庫)	金井 景子 (早稲田大学・日本近代文学)
12/10(木)	石川達三『生きていく兵隊』(中公文庫)	山岸 郁子 (日本大学・日本近代文学)
1/7(木)	小野正嗣『九年前の祈り』(講談社文庫)	大野 亮司 (亜細亜大学・日本近代文学)

※11月は市民文化祭の日になりが決定次第お知らせします。

とき 夜7時半〜9時半 (12月は夜7時〜9時)

ところ 公民館 3階講座室 定員 30名

申込先 公民館 ☎(572) 5141



- ルポ定形外家族 大塚玲子 (SBクリエイティブ) 367
- 〈自然科学〉
- 高校世界史でわかる科学史の核心 小山慶太 (NHK出版) 402
- 南極ではたらく 渡貫淳子 (平凡社) 402
- 進化のからくり 千葉聡 (講談社) 467
- 海底の支配者底生生物 清家弘治 (中央公論新社) 481
- 人は、なぜ他人を許せないのか? 中野信子 (アスコム) 491
- がん哲学のレッスン 樋野興夫 (かもがわ出版) 491
- 40人の神経科学者に脳のいちばん面白いところを聞いてみた
- デイヴィッド・J・リンデン 編著 (河出書房新社) 491
- 〈工業〉
- まちづくり解剖図鑑 片山和俊 (エクスマレッジ) 518
- 〈産業〉
- 日本の品種はすごい 竹下大学 (中央公論新社) 616
- 〈芸術〉
- 博物館と文化財の危機 岩城卓二 編 (人文書院) 721
- 水墨画入門 島尾新 (岩波書店) 709
- 〈言語〉
- 話し手の意味の心理性と公共性 三木那由他 (勁草書房) 801
- 『広辞苑』をよむ 今野真二 (岩波書店) 813
- 漢語の謎 荒川清秀 (筑摩書房) 814
- 五感にひびく日本語 中村明 (青土社) 814
- 〈文学〉
- きみのハラルル、ぼくのハラルル 笠岡誠一 (幻冬舎メディアコンサルティング) 91
- 聡乃学習 小林聡美 (幻冬舎) 91
- 荷風を盗んだ男 佐藤春夫 (幻冬舎) 91
- 三木成夫 いのちの波 三木成夫 (平凡社) 91
- 会いにくく旅 森まゆみ (産業編集センター) 91
- リボンの男 山崎ナオコ (河出書房新社) 91
- 旅の断片 若菜晃子 (KTC中央出版) 91
- 回復する人間 ハンガン (白水社) 92

図書室のこころ

# 南極ではたらく

—かあちゃん、調理隊員になる—

お話 渡貫 淳子

(第57次南極地域観測隊調理隊員)

厳しい自然環境、食料や水、行動にも制限のある南極では、何事もおろそかにはできない緊張感がありながら、様々な発見や感動に巡り合うことができます。

著書では、母として家事、育児に奮闘する日々を送っていた渡貫さんが、南極観測隊の調理隊員にチャレンジし、1年4カ月を過ごした南極での挑戦を描いています。

自ら望んでやってきた南極で、それぞれの役割を全うする隊員達の様子は、とても生き生きと書いていて魅力的です。

今回は、南極観測隊員となるまでや南極での日々など南極を通して感じたことをお話いただきます。

〈渡貫さんの本〉表題作(平凡社)

とき 4月25日(土)

昼2時〜4時

ところ 公民館 ホール

定員 30名(申込先着順)

申込先 4月17日(金) 朝9時〜

公民館 ☎(572)5141

\*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、状況により中止とさせていただきます可能性が1%ありますのでご了承ください。

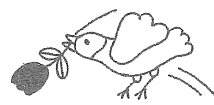


〈私の本棚から 第1回〉

千葉雅也 著

## 『勉強の哲学』

—来たるべきバカのために—



大久保芽衣

「勉強」とは何でしょうか。当たり前のように身近にある概念、「勉強」。みなさんも人生のどこかで関わってきたと思います。「勉強とは何か」と聞かれれば、人それぞれ思い浮かぶイメージがあることでしょう。私は机に向かって必死に参考書を読み、問題集を解く姿が思い浮かびました。

(共感してくれる方も多いのではないのでしょうか。)そのイメージから出発すると、「勉強」とは「辛い」「つまらない」「眠い」といった気持ちや「将来のために」「怒られないように」押し殺して行うものではないかというところに行きつきました。将来的に何か「良いもの」を得るために、現在の自分を犠牲にすることであると言い換えることも出来るかもしれません。そうすると、「勉強」とはなんだか他者依存的で自己犠牲的な概念であるような気がしてきてしまいました。

前述の予想に反して、この本の第一章は「勉強とは、自己破壊である」という衝撃的な見出しから始まります。勉強とは「別の考え方」言い方をすると環境へ引越すこと」であり、つまりそれは今まで自分が癒着して安定していた環境を壊すことであるという理論です。「？」となった方も多いかと思われそうですが、そこらへんの理論は本書で

しっかりと順を追って、時には図も駆使しつつ、何度も要約しながら分かりやすく論述されているので、ぜひ実際に手に取ってお確かめください。細かい内容は置いておいて、全体を通して「勉強」とは上っ面にスキルを重ねていくことではなく、限りなく自分自身と対話を重ねていく行為であるということに気が付かされました。著者である千葉雅也は、自身のツイッターでこの本を「遺言」だと称しています。そして、『勉強の哲学』は本当に書いてよかった。僕のことを身近でよく知っている人は、あの本に僕という人間が本当に書き残されているということがわかるはずだ。死んだらとくにあの本で思い出してほしい。こういう善意があつたやつだ」と綴っています。なぜ「勉強」について語る必要なのでしょう。この言葉の記録することになるのでしょうか。この言葉の意味は、私が初めに考えていたような「勉強」に縛られたままでは理解することは難しいでしょう。

先日、芸術論が追加された増補版が発売されました。「勉強」を語るためになぜ一見関係なさそうな芸術論が必要なのでしょう。自分の思う勉強と違いそうだと、という方がいらしたら、ぜひ一読ください。(文藝春秋)

### 係から

今号から大久保さんの「わたしの本棚から」がはじまります。次回以降もお楽しみください。

春は出会いの多い季節です。公民館図書室で新たな本との出会いや思出の本との再会を楽しみませんか。